

## ガラス工芸とハイテクガラス

株式会社キャビアール 代表取締役社長

森戸 祐幸

### Glass Artist and New Glass

**Yuko Morito**

CAVIART CORPORATION

#### 1. はじめに

私は、つい2年前まで、光ファイバとその応用製品メーカーである株式会社モリテックスの創業者・代表取締役として、長年にわたり多成分ガラスファイバ、光学レンズの製造に携わってきました。ご存知のように、光ファイバはガラスと密接な関係にあります。光ファイバは、ガラスを溶かして作りますが、実際にガラスを溶かして光ファイバを引いてみると、未知の部分も多く、なかなか理論通りにはいかず、何度も失敗を繰り返しました。

こうしたことを経験していくうち、光ファイバと昔からの私の趣味であったガラス工芸品、中でもペーパーウェイトを作っていく過程に共通点の多いことに気がつきました。

私は、昔から丸い形をしたものが好きで、旅行や出張のたびに国内外のビー玉やペーパーウェイト、アートマープルなど、丸い形をした様々なものを集めたり、イタリアのベニス、スコットランド、アメリカ、ボヘミア地方など、世界各地のガラス工房を見て歩いたり、実際に

ガラス工芸づくりに挑戦したり、いろいろなことを体験しました。世界中から収集した工芸品は、「玉の博物館」として、広く一般の方々に開放してきましたが、現在は東京理科大学・森戸記念館内にその一部が展示されています。

さて、そんなことをするうちに気づいたのですが、ペーパーウェイトを作るためのミルフィオリ（千の花）という技法がありますが、これは何色もの色ガラスの細棒（ケーン）を束ね、加熱して引き伸ばし、輪切りにしたものを並べて透明なガラスの中に包み込んでいく技法で、光ファイバイメージガイドを作る方法と全く共通します。

#### 2. ガラス工芸作家との関わり

私とガラス工芸との関わりは、こうしたことから始まって、徐々に深くなっていきましたが、その間に世界のいろいろなガラス工芸作家とも知り合いになりました。

アメリカのジョシュ・シンプソンさんもその一人です。「住める惑星」と呼ばれる彼の作品は、「私たちの住む地球は太陽系のわずか一部にしかすぎず、この広い宇宙には無数の星が存在する。その中には、私たちの地球と同じように生命体を宿す惑星がきっと存在する。」というイメージをもとに作られ、小さなガラス球体



写真1 ガラス工芸作家 ジョシュ・シンプソンさん

の中に海、大陸、山、森、などを包み込んだアート・プラネットで、どこか神秘的で魅力的なものです。

シンプソンさんは、アメリカのシカゴに本部のある「ガラス工芸家協会 (GAS: Glass Art Society)」の会長を歴任、その作品はボストン美術館やスミソニアン博物館、コーニンググラス美術館、クライスラー美術館、などの永久コレクションに加えられています。また、彼の作ったゴブレットは、ホワイトハウスの上院議員婦人会の昼食会用として選ばれ、ホワイトハウス博物館にも永久コレクションされています。

余談になりますが、彼の奥さんである“キャサリン・ケイディー・コールマン”さんは、アメリカの宇宙飛行士で、1999年7月に打ち上げられたスペースシャトル「コロンビア号 STS-93」に乗船するなど、これまで2回の宇宙飛行を体験している方です。

1998年5月、世界のガラスアートの祭典「GAS」が愛知県瀬戸市で開かれました。28回目でしたが、日本では初めての開催でシンプソンさんも来日されました。私は会場でシンプソンさんと久しぶりにお会いしたのですが、その時「来年、ケイディーがスペースシャトルに乗るよ」と打ち明けてくれました。私はシンプソンさんに「あなたの創ったペーパーウェイトを宇宙に持って行って、それを私にプレゼントしてほしい」と厚かましいお願いをしました。NASAの規制は厳しかったのですが、ケイデ



写真2 住める惑星 (ジョシュ・シンプソン作)

イーさんは、NASAの特別許可を得て、夫であるシンプソンさんの創った「住める惑星」をシャトル内に携帯し、宇宙空間とともに飛んで地球に帰還したのです。彼らは、宇宙を4日間と22時間49分、地球を80周、2,024,270マイルを飛んだそのペーパーウェイト「住める惑星」を「モリト・スペース」と名づけ、NASAの証明書とともに、私にプレゼントしてくれるために、2000年1月に来日してくれました。

私は滅多にないこのチャンスを、多くの方々に講演という形で共有していただこうと考え、お二人に私の母校である東京理科大学と、私の故郷である栃木県矢板市の市民ホールで特別記念講演を行っていただきました。

### 3. ガラスの新たな可能性を求めてガラス工芸学校へ資本参加

余談が長くなりましたが、シンプソンさんはじめ、世界中の数多くのガラス工芸作家の方々との交流と経験をふまえて、日本のガラス工芸界に微力ながらお役に立てれば、と思い資本参加したのが「東京ガラス工芸研究所」です。

東京ガラス工芸研究所は、1981年、我が国初のガラス工芸専門の学校として設立された最も歴史あるガラス工芸学校で、これまで著明なガラス工芸作家を多数輩出しています。

しかしながら、ここ数年、少子化による生徒



写真3 Blue New Mexico Bowl (ジョシュ・シンブソン作)



写真5 宇宙を飛んだ「モリト・スペース」

数の減少やガラス工芸を学べる美術・芸術系の大学が全国各地にできたことにより競争が激化し、従来以上に特色ある学校経営が求められています。

私は、従来のカリキュラム以外に、新たに「ガラス産業」に密着した新しい学科の新設等による独自の教育内容を盛り込むことを提案しています。例えば、光学レンズ、光学フィルタ、光ファイバ、液晶、EL、などのハイテクガラスと工芸ガラスの接点を充実させ、世界に通用する独自性のある教育をするガラス工芸学校です。そしてまた、工芸ガラスの技を活かしたハイテクガラスの世界の広がりも面白いと思っています。すでに、東京ガラス工芸研究所内



写真4 ジョシュ・シンブソンさん(右)と筆者(中央)、キャサリン・ケイディー・コールマンさん(左)：2000年1月23日、栃木県矢板市民ホールで



写真6 NASAの証明書

には、私が代表を務める株式会社キャビアールのガラス実験室として「ガラス研究開発室」を開設。独自開発のガラスリドローマシンや溶解炉、などを設置し、京都大学・田部 勢津久教授との共同研究による希土類ドーブガラス「発光ガラス」の開発なども行っています。

#### 4. おわりに

繰り返しになりますが、ガラスは、まだまだ未知の部分も多く、理論だけで片付けられないこともたくさんあります。そこで大切なことは、ガラスを実際に溶かしたり、触ったりすることが重要なのです。

ガラス工芸に取り組む時、ただ単にアートが好きだからやるのではなく、ハイテク分野も含

めたガラスの勉強をして、その知識をベースに、アートの世界に入っていく。また、その逆に自らの手で実際にガラスアート作品を創り上げていく“匠の技”とでも言うべき技術をハイテクの光学ガラスづくりに活かしていく。これ

からの時代、こうした工芸とハイテクの接点を究めるための講座、ユニークなカリキュラムを特色とする学校があってもいいのではないかと思います。